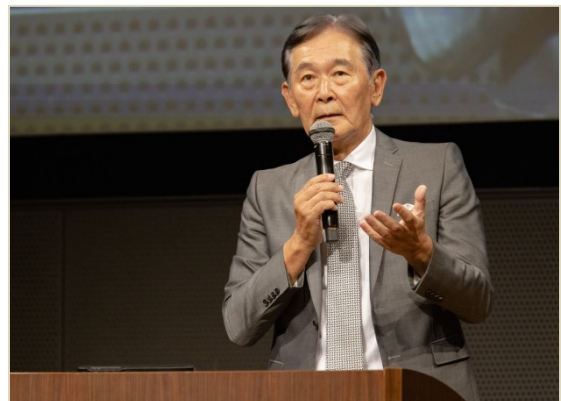

基調講演 I SDGsの18番目に文化芸術、集客エンタメに関する新項目を

文化庁長官 都倉 俊一 氏

みなさんこんにちは、文化庁の都倉です。今日のこの集客エンタメというテーマですが、これは文化芸術にとっては命綱です。ただですらいわゆる文化芸術表現が非常にデジタル化して、例えば音楽は、昔はレコードを買ってかけてそれを楽しんだり、テレビで観て楽しむところから、いまや全てが配信という状況です。ある意味で文化を食べ物に例えると、加工食品のようになってきて、なまものがなかなか食べられない。やはり何かフィルターを通して、例えば巨大なアリーナのコンサートにいたしましても、マイケル・ジャクソンやマドンナの時代から、ライブ「生」で歌っているけれども実はコンピュータ制御された完璧な音が数万人に届くと。一種のライブではありますが、血と汗と涙が飛んで来るライブではないわけです。本来芸術表現というのは、「生の人間が、生の人たちに物事を伝える」と言うのが基本です。そういった意味では、デジタル化の時代になったわけですが、この3年間はまさに、コロナのお蔭でそのパフォーマンスすら許されない状況になってしまいました。

私が文化庁長官に就任したのは2021年4月で、まさにコロナ禍真っ只中でした。文化庁で日本の文化行政、日本の文化を世界に発信したいとか様々な夢を持っていましたが、まず取り組まなければならなかったのは、一面に拡がったコロナの嵐でした。コロナの火がありました。それをなんとか消さなければならないと。まずは文化芸術関係者や業界の方たちを助けなければならないと、補助金や給付金の調達に奔走いたしました。文化庁の予算はご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、甚だ先進国の中では下の方で1,100億円くらいの予算でおこなっております。ただこの時、経済産業省と一緒に対応したわけですが、経済産業省はJ-LOD（コンテンツグローバル需要創出促進・基盤強化事業費補助金）というプロジェクトを組みました。文化庁はAFF（ARTS for the future! : コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業）というプロジェクトを組みまして、実に国から2,800億円の補助金・給付金を得ました。文化芸術関係者や、海外からオーケストラやバレエやオペラを呼んでくるようなプロモーターの方々だって、興行は全て中止ですからキャンセルフィーを保障するという事は、文化芸術を助けるという意味で国の役目でした。私もまだ民間から霞が関に来たばかりで、正直国もやればできるじゃないかという感じでした。本当にその気になれば、文化芸術を救うことができると僕は非常に喜ばしい思いで仕事を始めたわけです。文化芸術やアーティストを花に例えると、肥料だけどんどん与えても、水や太陽をあげて風が吹かないと花は萎れてしまう。文化芸術関係者、特に表現者はやはり花と同じです。一番彼らに必要な太陽と水が何かというと、表現の場なのです。表現の場を与えてあげないと、いく



ら給付金をあげてもやはり花と一緒に枯れてしまう。当時は、人が集合する場所は全て閉鎖。クラスターという言葉もありましたが、人が集合し密になる場所はコロナの発源、震源地のようになりますから、それはある程度規制していかなければなりません。美術館や博物館や、クラシックコンサート会場も全て閉鎖だったのです。おかしいじゃないかということで、僕も随分東京都や政府に掛け合いました。2021年の段階では、人が集まる場所はやはり取り敢えず閉鎖するというのは、行政らしいやり方かもしれません。

僕は何とか表現の場を確保しなければならないということで、「がんばれ！CHORUS PROJECT」ということを始めました。中学生や高校生のブラスバンドに、全国の教育委員会にお願いして僕は『がんばれ！がんばれ！』という曲を書いたのです。そしてその譜面を先生方に配って、それをブラスバンドであればトランペットだとか金管楽器ほかにもたくさん譜面を書き、それをみなさんに配ったのです。そしてクリックというテンポだけを渡して、みんな各自の部屋でネットを通じて演奏するというのをやりました。これはうまくいきました。全国の12～13校の生徒が集まって、ネットの画面を分割して、クリックに合わせて演奏すると言うことをやりました。みんな1人ずつなのです、各自の家で演奏しているわけですから。それで拍手喝采、良かったと言って終わったのです。というのは、それだけで終わったのです。もちろん達成感があったのですが、なんとなくただ上手くいった、そういう達成感なのです。やはり芸術というのは空気に触れないと化学反応を起こさない。例えばライブエンタテインメントの一番の重要さは、演者とお客さんが対面で向かって、そして演者が一生懸命緊張して汗をかきながらやっているものに対して、お客さんが反応する。「あいつ下手じゃないか」というのだから反応なのです。それがまた舞台に返ってくるのです。このフュージョン、この相互作用というのが実はライブエンタテインメントの命なのです。ライブエンタテインメントというよりも芸術の命なのです。その人間のやりとりがなければ、やはりただ達成したということだけなのです。だから僕は全国の子どもたちに、「コロナ禍が終わったら全員で日本武道館に集まろう。そしてこの『がんばれ！がんばれ！』という曲をもう一回演奏しよう。」というメッセージをお渡しして、そのプロジェクトは終わりました。

今日は「集客エンタメ産業」というテーマですが、芸術の基本はやはり「生」なのです。人間と人間のやり取り、これが本当のエンタテインメントなわけです。色々なエンタテインメントが世の中にはありますが、1人の役者が例えばここで自分の表現をすることによって、その役者が自分の世界をみなさんと共有すると、これは歌でもそうですが、その反応を見てお客さん同士もこれはみんな感動しているなど伝わってきます。昔の各家庭にテレビが1台しか無かった時代。70～80年代、みんなでエンタテインメントを共有していました。おじいちゃんや孫が喜んだからとかではなくて、全員でそれを共有する。そしてそれを月曜日に学校行って、みんなで日曜日の夜にテレビ番組で観たあの歌は良かった、あの役者は良かったとかそういったものを共有できた時代。そこからだんだん1部屋に1つのテレビの時代がやってきました。今やテレビなんて観ない時代がやってきたわけです。音楽や芸術が空気に触れないことが多くなってきました。今の若い子たちは大衆音楽をどんなヒット曲でもよいのですが、携帯電話で「拾う」というのです。拾って、デリートするのです。僕の世代は第一次ビートルズ世代と言われましたが、ビートルズのアルバムが出ると、貯めたお小遣いで行列をつくって買いに行き、そしてそのLPを買ったら嬉しくて抱いて寝たぐらいです。その時代の音楽に対するひとつの考え方と、今の携帯電話で

「拾って」飽きたらすぐデリートしてしまう、この1つの創造物に対するリスペクトと仰いますか、そういったものがだんだん希薄になっている。これに僕は非常に危機感を覚えています。2021年に和歌山県で国民文化祭（第36回国民文化祭・わかやま2021）が開催されましたが、まさにコロナ禍の真っ只中で、毎年天皇皇后両陛下がご臨席されますが、この時はビデオメッセージをくださいました。陛下のお言葉の中に、「文化芸術というのは、人の心に潤いを与える」とありました。まさにコロナが終わらんとしている今、いかに人の心が潤いを必要としているか。「人はパンのみには生きていけない」という聖書の言葉がありますが、いかに人間が人間同士のふれあいや温もり、心や魂の栄養を必要としているかを、このコロナ禍で非常に我々は実感したのではないのでしょうか。ある意味で集客エンタメの今後はどうなるか、僕は前途洋々だと思っています。今本当に参加意識がすごいです。

文化庁は今年京都に移転をしました。明治時代以来はじめての中央省庁が地方に移転したのです。実を申しますと、この移転は大変なことでありました。5月15日から本格的に業務を始めましたが、実に390人の職員が東京から京都に移りました。僕も含め皆なんだから出張に行くような、転勤になってまた東京に帰ってくるような雰囲気なのですが、そうではないのです。文化庁は、今後一生京都にあるわけです。京都という場所に根づいている生活の中に生きている文化は、東京では味わえない感じがします。僕は生粋の江戸っ子ですが、何か京都に行くと時間の流れがゆっくりとなっている気がします。まさに千年続いている都ですから、お祭りから行事から、ありとあらゆるイベントがみなライブなのです。そこにコロナ禍の3年くらい、人っ子一人来ないがらんとした京都だったらしいのですが、今や、食文化からお祭りからコンサートから色々なイベント全部を味わいたいと全国、世界からみなさんが京都に足を運んで、足の踏み場もないほどです。日本の文化芸術を世界へと、これが文化庁の大きな目標の1つです。それをこれから京都から色々な意味で発信していく、これは単に重要無形・有形文化財だけではなく、色々な新しい取り組み、例えばニューメディアと言われているマンガやアニメやゲームでも、実は京都が本場みたいなどころがあるのです。アニメ制作会社も京都にはたくさんあります。そういったところから世界に発信していくと言うのは、非常に意味があることだと思っています。

今日のメインのテーマ、Sustainable Development Goalsですが、これは持続可能な発展、その目標や目的という意味で、今非常に日本でも盛んに使われております。17項目ありますが、この中には文化芸術という言葉はありません。実はこの話は2021年僕が文化庁長官に就任したばかりの頃に昔から仲の良い友人である、ぴあの矢内社長と話す機会があり、おかしいよねとお互いに話しました。その年の8月にG20の文化大臣会合がイタリアであり、通常、文化大臣会合には文部科学大臣が参加しますが、その時にたまたま、当時の文部科学大臣の萩生田さんがワシントンである科学技術会議に参加されるということで、僕が代わりにG20の文化大臣会合に出席しました。そこでみな基調演説をするわけですが、その時に僕は矢内社長との話をまとめてSDGsの18項目めを作ったらいかがでしようかと大胆にも新米の文化庁長官が発言したのです。勿論それはなかなか不可能に近い。国連のありとあらゆるプロセスを経て、SDGsの17項目が決議されたわけですから、それをもう1つ足せというのはなかなか難しいわけです。それを分かっている、僕もわざと議事録に載せたくて発言をしました。今でもそれは思っております。このコロナ禍で先ほどから申し上げているように、人はパンのみには生きてはいけません。衣食足りて礼節を知る

と言いますが、衣食足りて初めて人間というものは、文化芸術のありがたさがわかるのです。雨露をしのいでもう食べる物もなく、生きるのが精一杯の時は心の余裕がない。だから古今東西どんな文明でも、やはり一番安定して栄えたのは戦争のない時代で、日本であれば平安時代あるいは文化文政で江戸時代、そういった時に初めて文化は栄えるわけです。今はグローバルに情報も共有できる、そしてお互い助け合っている地球社会でありますから、我々先進国のような豊かな国は飢餓に苦しんでいる国に食糧を与えるのも良い、色々な医療の援助をおこなうのも良い、でも文化芸術で心の栄養を与えるための努力もするべきではないかと思っています。この3年間のコロナ禍の中でそれを確信しました。

このSustainable Development Goalsの18項目、SDGsは17項目の達成目標を設定しているが、その中に文化芸術に関する項目がない。是非18番目の項目に「文化芸術の享受」をいれてほしい。先ほどから申し上げていることですが、本当に心に栄養を得る、これが生きる糧となる。それを与えられるのが文化芸術以外にはないのです。コロナ禍の中、ありとあらゆる文化芸術活動が制限されるなか、人類は人との交わりや温かさに触れることが

Sustainable Development Goals Clause 18

- ・SDGsは17項目の達成目標を設定しているが、その中に文化芸術に関する項目がない。
- 是非18番目の項目に「文化・芸術の享受」をいれてほしい。



がいかに大切か身をもって経験しました。その人と人のふれあいそのものが文化芸術なのです。考えてみますと、人類が誕生した時に、それこそホモサピエンスの頃から、やはり動物との一番の違いは何かと言うと自己表現なのです。それは例えば、壁に墨で絵を描いた洞窟壁画などたくさんありますね。もしかしたら原始的に何か音を鳴らしたい、最初はやはり打楽器だったのでしょう。色々なところを叩いてリズムを取ったりする、そして人

と人とのふれあいに勿論声というものがある、それで伝えたい。これが歌になっていくわけです。そして足を踏み鳴らすのが、もしかしたらダンスの原点。つまり人間は食べ物があって火を覚え、そして洞窟でもどこでも生活して、動物だとそこで終わりますが、人間はそこから先が人間たる所以なわけです。文化芸術というのは人間であることの証明なのです。人々はこの人類の歴史でもある文化芸術を享受し、人生を豊かにおくることのできる権利があると僕は規定したいと思います。色々なデジタルネットワークでやろうと思えばアクセスはできるのですから、そういったアクセスでどんなに貧しく困難を極めている地域でも、やはり人々の心に文化芸術を届けるとというのが豊かな国・先進国の務めではないかと、是非この18項目としてSDGsに足していただければと念願している次第です。

- ・「人はパンのみでは生きて行けない」というのは聖書の一節であるが、人間は心の豊かさ、心が満たされることで生きて行ける。目に見えないこの力は人の生きて行く原動力であり、心に栄養を与えることが人をエネルギーで満たす。
- ・コロナ禍の中、あらゆる文化、芸術活動が制限される中、人類は人との交わり、温かさに触れることがいかに大切かを身をもって経験した。その人と人の触れ合いそのものが文化、芸術である。

- ・人類の生命の営みが始まって以来、描くこと、音を奏でること、歌う事、踊ることが生きていく証であり、それぞれの地域で発展しながら今日まで受け継がれてきた。人々はこの人類の歴史でもある文化芸術を享受し、人生を豊かにおくることのできる権利を有する。
- ・デジタルネットワーク社会において世界中の人々があらゆる文化、芸術にアクセスできるよう国際社会は努力すべきである。